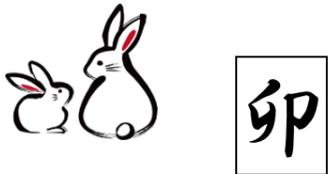


おたや祭と山車



十五夜お月さん うさぎの餅つきの場合

上宿第1場

今日は十五夜お月さん。おじいさんとおばあさんがこんな会話をしています。「おじいさん、おだんごをおそなえしましょう。」「そうじゃな。今日はお月見。」、おだんごとススキもおそなえして、秋の実りに感謝します。「おいで、おいで、お月さま。」とおじいさん。「早く出てきてくださいな。」とおばあさん。すると、山の間からまんまるい月がのぼってきました。きれいな満月です。「きれいなお月さま。あれあれ、うさぎのおもちつき。」「そうじゃな。うさぎのおもちつき。」、ふたりは、うさぎがペッタン、ペッタン、おもちをつくのを楽しそうにながめていました。中国から伝わったお月見の風習。また、日本では古くから「月にうさぎがいる」と言われてきました。やがて「月のうさぎが餅つきをしている」と考えられ、今に語り伝えられています。月の表面の模様から「餅つきをするうさぎ」が連想されたようです。今年は卯年、大きな飛躍が期待されます。

竹取物語 かぐや姫の誕生の場合

上中町第2場

かぐや姫は平安時代に書かれた竹取物語が原典の子供向けにわかりやすく紹介したお話といわれています。「今は昔、竹取りの翁おきなといふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造みやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうていたり。われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめり。とて、手のうに入れて、家に持ちて来ぬ。妻の姫おうなに預けて養はず。うつくしきこと、限りなし。いとをさなけば籠かごに入れて養ふ。」(語訳)「今となつては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。野山に分け入って竹を取つては、色々なことに使っていた。ある日竹の中に、根もと光る竹が一本あった。不思議に思って、近寄つて見ると、筒の中が光っている。それを見ると、三寸ほどの人が、たいそうかわいらしい様子ですわっている。翁は手の中に入れて、家に持って帰った。翁は妻であるおばあさんに預けて育てさせる。そのかわいらしいことはこのうえもない。たいそう幼く小さいので、籠に入れて育てる。」後のかぐや姫物語の有名なお話はたくさんありますが、竹取物語の最初のお話の場面がこの場であります。

「元寇 蒙古襲来」の場合

中町第3場

鎌倉時代中期に、当時モンゴル高原及び中国大陸を中心領域として東アジアと北アジアを支配していたモンゴル帝国(元朝)およびその属国である高麗が2度にわたり日本(九州北部)に攻め込んできました。この日本史上最大の国難ともいえる侵攻が、「元寇」であり、「蒙古襲来」とも言われています。

「元寇」という言葉は、皇帝フビライ・ハンがモンゴルの国号を「大元」としていたことと、侵略を意味する「寇あだす」という単語が由来しているようです。

フビライは、かつて遣唐使けんとうしというものがあ中国と日本が交流していたこと、また日本には大量の金があることなどの話を聞き、日本を支配するため6回も使節を送りますが、日本を服属させることはできませんでした。そしてついに、武力行使に踏み切ります。

1度目は1274年の「文永の役」で、元軍は約900艘の軍船に4万の兵を率い、かなり大規模な戦いとなりましたが、戦況優勢な元軍がいったん船に戻った際、暴風雨に見舞われ撤退しました。

1281年の「弘安の役」が2度目で、15万とも言われる元軍が攻めてきましたが、台風と思われる被害のため打撃を受けたところへ日本軍の追撃により、元軍の侵攻は成功しませんでした。残念なことに、現在でも侵攻・侵略の歴史が繰り返されていますが、このような行為が起こらない平和な世界、社会の実現を願い、侵攻・侵略が失敗に終わったこの場面を奉納いたします。

カチカチ山 ウサギがいたずらタヌキを懲らしめる場合

下町・藤見町第4場

昔あるところに畑を耕しているおじいさんとおばあさんがいました。畑には、毎日、いたずらなタヌキがやってきて悪い事を繰り返しました。

おじいさんは罠でタヌキを捕まえ、おばあさんに捕まえたタヌキをタヌキ汁にするようにいって畑仕事に行きました。タヌキはおばあさんに、「もう悪さはしない。家事を手伝う。」とやってうそをつき、縄を解かせて自由になると、なんと助けてくれたおばあさんを殴りました。「はは一ん。バカなババアめ、タヌキを信じるなんて。」、タヌキはそうやって、裏山に逃げていきました。しばらくして帰ってきたおじいさんは、倒れているおばあさんを見てびっくり。「おばあさん！ああ、何てことを。」、これを聞いたウサギは、親切なおばあさんの仇かたきを討つことにしました。ウサギはタヌキをしば刈りに誘い、タヌキにたき木を背負わせ、「タヌキさん、家までたき木を運ぶのを手伝ってくれないか。」、そうやってウサギは、こっそりと背中なたき木に火をつけました。「カチ、カチ。」「おや？ウサギさん、今の『カチカチ』という音は何だい？」、「ああ、この山はカチカチ山さ。だからカチカチというんだ。」、そのうちに、タヌキの背負ったたき木は、大きく燃えだしました。タヌキは背中に大やけどをしました。

その後やけどをした背中に、唐辛子を練った塗り薬を塗られたり、泥船に乗っておぼれ死にそうになったタヌキに、ウサギは「おばあさんをいじめたバツだ。」というと、「ごめんなさい。ごめんなさい。もう二度と悪さはしません。どうか、助けてください。」と、タヌキが一生懸命あやまったので、ウサギはタヌキを助けてあげました。そしてタヌキを連れておじいさんとおばあさんの家に行き、「おじいさん、おばあさん、この前は悪いことをしました。どうかゆるしてください。」と、タヌキがあやまったので、それからはみんな仲良く暮らしましたとさ。

どうする家康 「関ヶ原の戦い」の場合

桜町第5場

慶長5年(1600)天下分け目の「関ヶ原の戦い」が行われた。9月15日朝、美濃(岐阜県)関ヶ原み の とくがわいえやすに徳川家康率いる東軍約7万と、石田三成率いる西軍約8万が布陣した。家康は桃配山ももくばりやまに本陣を敷き、傍かたわらには戦国最強と言われる本多忠勝が控えた。三成は笹尾山本陣のすぐ前に勇将島左近を置いた。戦いは夜明けとともに始まり、当初は西軍が優勢に戦いを進める。次第に西軍から東軍へ寝返る者が増えていく。開戦から約6時間後、混乱を極めた戦場で西軍は総崩れとなり、東軍が大勝利を収める。三河(愛知県東部)の国衆くにしゅうという小勢力に過ぎなかった徳川家康が、「天下泰平」「無病息災むびょうそくさい」を心から願う志こころざしをもち、私利私欲を捨てて天下のために尽くし戦国の世を終わらせ、徳川260年と言われる太平の世を創った。

江戸幕府が鎖国政策を採る以前、天下人となった家康は17世紀の大航海時代において積極的な外交を展開し、諸外国との交易を盛んにした。西洋諸国からの揺さぶりをかわしながら、中立で冷静な態度を貫いた。

あの時代にありながら、世界情勢を見据えた上で日本という国を俯瞰ふかんしつつ、その道筋を示した。今の分断の時代に、「世界の未来に向けて、日本は何ができるのか」、家康だったらどのような政まつりごとをするのであろうか。元和2年(1616)75歳におよぶ生涯を閉じる。

— おたや祭と山車の由来 —

長和町の古町(旧長窪古町)に所在する古町豊受大神宮の例祭は、通称おたや祭として知られています。

その起源は江戸時代後期の文政11年(1828)の文書が、現在のところ最も古い記録として残されていますが、お祭はこれ以前よりかなり古くから行われてきたと考えられます。

古町豊受大神宮では、伊勢神宮にならって20年ごとに遷座祭が行われ、例祭は毎年1月14日の夕方から15日の昼頃まで行われます。お客のある家庭は、この日を年始にして、その歳の出発とするのを慣わしとしています。また、参詣者は上田や佐久方面からも訪れ、多くの人で賑わいます。

おたや祭には、庶民の生活が安定して余裕が出てくると、お祭を盛んにするために山車が奉納されるようになり、旧家所蔵の天保6年(1835)の日誌に記載されている、「御田(旅)屋賑わし、かざり物数ヶ所美事也」との一文が、現在判っている最も古い山車の記録です。

山車は素朴な農民美術を伝承する貴重な伝統文化として、昭和38年に長野県無形民俗文化財選択に指定され、現在は区単位の5場所の保存会によって制作されています。

長和町おたや祭山車保存協賛会

令和5年(2023)1月

【裏面、各場山車の位置図】